

Title	他者依存性と心理的苦痛の關係に及ぼすソーシャル・サポートの影響
Author(s)	福岡, 欣治
Citation	対人社会心理学研究. 2003, 3, p. 9-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8541
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

他者依存性と心理的苦痛の關係に及ぼすソーシャル・サポートの影響¹⁾

福岡 欣治 (静岡文化芸術大学文化政策学部)

本研究では、大学生 233 名を対象とした2つの調査により、依存性と心理的苦痛の關係に及ぼすソーシャル・サポートの影響について検討した。調査1では、他者依存性とサポート授受に関する認知との關係を調べた。他者依存性の高い人は、より多くのサポートを望んでいるが、実際にサポートを得ることについては心理的な抵抗感をより強く感じていた。調査2では、他者依存性とサポート源の人数および満足度、生活ストレス評価との關係を調べた。他者依存性の高い人は、サポート源の人数は依存性の低い人と同様であるが、サポート關係への満足度は低かった。パス解析により、サポート關係への満足度の低さおよびネガティブなストレス評価が他者依存性と心理的苦痛の關係を媒介していることが示唆された。これらの結果にもとづき、個人にとっての支持的な対人關係のよりよいあり方を考察した。

キーワード: 他者依存性、ソーシャル・サポート、心理的苦痛、媒介的影響、支持的な対人關係

問題

本研究では、他者依存性とソーシャル・サポートの関連性についての2つの調査結果を報告する。周囲の人との間に温かい關係をもつことは心理的な安寧にとって極めて重要であると考えられる。しかし、他者依存的な人は、こうした關係を求めつつ心理的には不健康な状態にある。本研究では、このような他者依存性と心理的苦痛との關係を、福岡(1998)に引き続きソーシャル・サポートの視点から検討する。そして、その結果をふまえ、個人にとっての支持的な対人關係のよりよいあり方を考察する。

ソーシャル・サポート研究と他者依存性研究

ソーシャル・サポート研究は、支持的な対人關係の存在やそこから得られる様々な援助が、生活上の出来事に対する直接あるいは間接の対処資源として、その人の心身の健康が損なわれるのを防ぐ役割を果たすことを主張してきた(Cobb, 1976; 久田, 1987; 浦, 1992を参照)。

一方、他者依存的な人とは、その根底に養護的・支持的な關係を獲得し維持したいという強い欲求を慢性的にもっている人である(Bornstein, 1992)。そして、他者依存性の強い人は、抑うつを始めとする種々の心理的苦痛に陥りやすいことが指摘されている(Blatt, D'Afflitti, & Quinlan, 1976; Bornstein & Johnson, 1990; Overholser, 1992)。

他者との温かい關係をもちたいという欲求は、人間にとって基本的なものとされる(Baumeister & Leary, 1995)。いわば、この欲求それ自体の強弱を扱っているのが他者依存性研究、この欲求の対象としての対人關係を扱っているのがソーシャル・サポート研究であり、両者は実のところ表裏のような關係にあると言える。

他者依存性と心理的苦痛: ソーシャル・サポートの観点からの先行研究

さて、他者依存性のもたらす問題としての心理的苦痛との関連性は、ソーシャル・サポートの観点からはどのように考察しうるであろうか。

福岡(1998)は、大学生を対象とした調査でこの問題を検討している。可能性としては、依存的な人はサポートが入手可能であるような対人關係をもっていないために心理的苦痛を感じやすい、依存性とサポートの入手可能性との間に直接の關係はないが依存的な人ではサポートが心理的苦痛を軽減する効果をもたない、という2通りが考えられるが、福岡(1998)で見出された結果は後者であった。すなわち、他者依存性とサポートの入手可能性との間には何ら有意な關係が認められず、依存的な人はそうでない人と量的には同程度のサポートが得られると認知していた。しかし、心理的苦痛に対するサポートの効果は、依存性の低い人と異なり高い人では全く認められなかった。

なお、類似の結果は Lefcourt, Martin & Saleh (1984)、Hill (1987)によっても見出されている。これらの研究では依存性を直接は扱っていないが、親和欲求の強い人では心身の自覚症状に対するサポートの効果あまりみられないことが明らかにされている。

本研究の問題設定と目的

福岡(1998)、あるいは Lefcourt *et al.* (1984) や Hill (1987) の結果は、サポートの入手可能性が量的に同様であるにもかかわらず依存性の高低によってサポートの心理的苦痛への影響力が異なることを意味している。このことから、他者への依存性が高い人には、ある程度のサポートが存在する場合でもそこから心理的苦痛の軽減に寄与するポジティブな効果を引き出すことを困難にするような何らかの要因があると考えられる。

そこで本研究では、まず調査1において、サポートに関

する様々な認知(サポート認知)と他者依存性の関係を検討する。そして、この結果をふまえ、調査2では、サポート関係の現状とそれへの評価をサポート源の人数と満足度からとらえ、他者依存性との関連性、さらには他者依存性と心理的苦痛の結びつきに対する媒介的な影響を検討する。

調査1 他者依存性とサポート認知

目的

調査1では、他者への依存性の高い人がサポートがあってもそこからポジティブな効果を引き出し得ない要因について探求する。

そこで注目されるのが、他者に助けられることが個人の安寧にとって常に好ましい意味をもつわけではないことを指摘する先行研究の知見である。具体的には、援助行動に関する社会心理学的研究では、他者から援助を受けることは、時に自尊心への脅威となったり、心理的な負債感を生じさせたりする可能性があることが明らかにされている(Greenberg & Westcott, 1983; Nadler & Fisher, 1986; 西川・高木, 1990)。これらの研究で扱われているのはどちらかといえば単発の非日常的な援助に対する受け手の反応であるが、もしも持続的な対人関係の中での日常的なサポートに関しても同じようにネガティブな反応ないし認知が生じているとすれば、たとえサポートが入手可能であるとしてもそれがポジティブな意味をもつことにはならないであろう。

そこで調査1では、他者依存性の高さと、サポートを受けるに伴う自尊心への脅威や心理的負債感といった否定的な認知との関連性について検討する。サポートに関する認知は、その他、欲求度(サポートを望む程度)、入手可能性、提供可能性についても測定する。欲求度は依存性の高い人が実際に多くのサポートを望んでいるのかを確認すること、入手可能性は福岡(1998)の結果を再確認すること、そして提供可能性は入手可能性との対比によりサポートに関する認知をより多面的に捉えることを意図したものである。

方法

被調査者 大学生233名(男子119名、女子114名)。平均年齢は19.6歳($SD=1.13$)であった。

測定内容 他者依存性: Hirschfeld, Klerman, Gough, Barrett, Korchin, & Chodoff(1977)による他者依存性尺度の日本語版(McDonald-Scott, 1988)を用いた。23項目からなる4件法(「1. そうでない」「4. 非常にそうである」)の尺度である。原版は「情緒的依頼心(6項目)」「社会的自信の欠如(9項目)」「自律の主張(8項目)」の3つの下位尺度を含むが、「自律の主張」については他の2尺度と相関がほとんどなく、尺度構成上

問題があるとされる(Birtchnell, 1991)。本研究のサンプルでも同様の結果であったため、「情緒的依頼心」「社会的自信の欠如」の2尺度の合成得点をもって他者依存性の指標とした。その際、両尺度の項目数の違いを考慮し、いったん項目平均を算出した後、その平均値を求めた。合成前の両尺度の係数はともに.60以上であり、尺度間の相関係数は $r=.41$ ($p<.001$)であった。高得点であるほど、周囲の他者一般に対して依存的な傾向にあることを示す。

サポート認知: 福岡・橋本(1997)の12項目から回答者の負担軽減を意図して8項目を抜粋した(Table 1)。そして各項目について、自分の周囲の人たち(家族や友人など)とのサポートのやりとりに関して、欲求度(どの程度してほしいと思うか)、入手可能性(どの程度してくれると思うか)、受け手になることによる自尊心への脅威(もししてもらったら、どの程度「情けない」「恥ずかしい」と感じるか)、受け手になることに対する心理的な負債感(もししてもらったとしたら、どの程度「すまない」「もうわけない」と感じるか)、提供可能性(どの程度してあげられると思うか)の5つの質問をおこない、いずれも5件法(「1. ほとんど、あるいは全くそうでない」「5. たいへんそうである」)で評定させた。項目抜粋の際には、4内容(アドバイス・指導、なぐさめ・励まし、物質的・金銭的援助、具体的行動による援助)より各2項目ずつとし、5つの質問いずれについても違和感のないよう配慮した。5指標とも、8項目の合計点を算出した。係数は、若干低いものもみられたがいずれも.60以上であった。

Table 1 ソーシャル・サポートの項目内容

-
- | |
|--|
| (1)私がやっかいな問題に頭を悩ませているとき、冗談を言ったり一緒に何かやったりして、私の気をまぎれさせる |
| (2)私が忙しくしているとき、ちょっとした用事(家事や簡単な仕事など)の手助けをする |
| (3)私が精神的なショックで動揺しているとき、なぐさめる |
| (4)私が緊急にかなり多額のお金を必要とするようになったとき(家賃や学費の支払い、事故の弁償など)、その分のお金を貸す |
| (5)私が学校や職場、地域、家庭などでの人間関係について悩んでいるとき、相談にのる |
| (6)私が病気で数日間寝ていなくてはならないとき、看病や世話をする |
| (7)私が財布をなくしたり物をこわした弁償などで急に数千円必要になったとき、その分のお金を貸す |
| (8)私が自分にとって重要なこと(たとえば進学や就・転職、長期ローンを組むべきかなど)を決めなくてはならないとき、アドバイスする |
-

実施方法 複数の心理学関係科目の出席者を対象に調査票を配布し、協力の得られた人について、その場で回答するかあるいは2週間以内の提出を求めた。

結果

各指標の平均値と男女差 最初に各指標の平均値を算出してt検定により男女差を検討したところ、他者依存性については10%水準での傾向差があり、女子の方が若干高得点であった(男子 $M=2.11$ ($SD=0.46$), 女子 $M=2.21$ ($SD=0.47$), $t(231)=1.65$, $p<.10$)。サポート認知については自尊心への脅威を除く4指標で有意差があり($t(231)=2.21-5.72$, $p<.05-.001$)、いずれも女子の方が高得点であった(Table 2を参照)。

他者依存性の高低によるサポート認知の差異 続いて他者依存性とサポート認知の諸指標との関連性について検討した。事前に散布図を調べたところ若干分布に偏りがあり、また必ずしも完全な直線性を示していないのがみられ、また後述のように交互作用の傾向が一部にみられたことから、ここでは他者依存性得点の中央値で高低2群に分け、依存性の高低と性別の2要因分散分析を各指標についておこなった(Table 2参照)。

Table 2 他者依存性の高低別にみたサポート認知

サポート指標	依存性高		依存性低	
	平均	SD	平均	SD
(男子)				
欲求度	27.25	4.86	25.67	4.53
入手可能性	25.69	5.03	26.92	5.11
自尊心脅威	28.80	4.49	27.77	4.41
心理的負債感	22.34	5.98	21.13	5.30
提供可能性	25.88	4.90	24.50	4.79
(女子)				
欲求度	28.88	4.22	26.89	4.10
入手可能性	29.84	5.24	30.11	4.03
自尊心脅威	29.98	5.09	29.23	4.39
心理的負債感	21.98	6.01	20.70	5.47
提供可能性	26.69	4.78	27.32	3.83

その結果、サポートの欲求度では他者依存性の主効果が有意であり、依存性の概念と対応していた。入手可能性では依存性の主効果はなく、得られると思うサポートの量には違いがみられなかった。自尊心への脅威と心理的負債感での依存性の効果は、前者において10%水準での傾向差がみられ、後者では有意水準に達していなかった。ただし両指標とも依存性が高いほど高得点であり両者の間に有意な相関(男子: $r=.20$, $p<.05$, 女子: $r=.33$, $p<.001$)もみられたことから両者の平均値を算出した上で

同様の分散分析をおこなったところ、5%水準で依存性の主効果がみられた($F(1,229)=3.96$, $p<.05$)。この結果は、依存性である人ほどサポートを受けることに対してより否定的な認知をしていることを意味するものであった。提供可能性では交互作用が10%水準の傾向でみられたが、下位検定では男女とも依存性の高低による差は有意ではなかった。

考察

他者依存性の高い人は、そうでない人と同程度にサポートが得られると認知しているが、実際にそれを受けることに対しては心理的な抵抗感をもっているようである。後者の結果は必ずしも明瞭なものとはいえないが、依存的な人は同時にサポートへの強い欲求をもっており、にもかかわらずサポートを受けることに多少とも抵抗を感じるというのは、一種の葛藤状態を意味している。この葛藤状態が、福岡(1998)で見出されたような、サポートの入手可能性が心理的苦痛を軽減することにはつながらないという事態を招いているのではないかと思われる。

なお先行研究では、概して依存的な人ほど実際の援助要請行動は多いとされている(例えば O'Neill & Bornstein, 1990; Shilkret & Masling, 1981)。依存性の高い人がもしも背後には抵抗感を持ちながら多くの援助要請行動をおこなっているとすれば、依存的でない人々以上に援助を受けることによりネガティブな心理状態を生じるであろう。また、そうした形で受ける援助は、依存的な人において示唆される対人関係に対する手段的な志向性の低さ(Bornstein, 1992)とも相俟って、問題解決への有効性が乏しく、結果的には援助者との関係におけるより強い不満足感にもつながっていくと考えられる。

調査2 他者依存性と心理的苦痛の関係に及ぼすサポート満足度の媒介的影響

目的

本研究では、調査1に引き続いて、他者依存性の高い人におけるサポートの特徴と、それが心理的苦痛に及ぼす影響について検討する。調査1ですでにサポートの入手可能性と提供可能性、自尊心への脅威や心理的負債感を扱ってきた。そこで調査2では、調査1の結果もふまえ、サポート源の人数およびサポート関係への満足度を取り上げる。

心理的苦痛に対する直接効果の観点からは、特に不満足なサポート関係は人の基本的な欲求を充足するには不十分であり、それゆえ心理的苦痛と関連する。さらに、Cohen & Wills(1985)が指摘しているように、これらはストレスへの評価を左右することで心身の健康に影響することが考えられる。したがって、もし他者依存性がサポート関係の満足度やサポート源の人数と関連する

のであれば、これらの要因は他者依存性と心理的苦痛の結びつきに対して媒介的な役割を果たすことになる。

以上の観点から、本研究では、他者依存性とサポート源の人数、サポート関係への満足度との関連性、およびそれらの媒介的影響について検討する。

方法

被調査者 調査1と同じ大学生233名(男子119名、女子114名)を被調査者とした。

測定内容 他者依存性:調査1に同じ。

サポート源の人数、満足度:調査1と同じ8項目を用い、Sarason, Levine, Basham, & Sarason(1983)のSSQにならい、各項目についてサポート源(助けしてくれると思う人)を最高9名まで挙げさせ、またそれらの人たち全体について(該当者がいない場合にはそのことについて)の満足度を7件法(「1.とても不満」「7.とても満足»)で回答させた。両指標とも8項目の合計点を算出した。係数はいずれも.80以上であった。

生活ストレス:尾関(1990)による大学生用生活ストレス尺度を用いた。大学生が体験しやすい出来事計40個について、それぞれ過去6か月間に体験したかどうか、体験した場合にはどの程度つらかったかを7段階(「-3.非常につらかった」「+3.非常に楽しかった»)で回答させる。本研究ではストレスをどのように評価するかという観点から、つらさの程度の合計点を算出した。係数は男女とも.80以上であった。

心理的苦痛:精神健康調査票GHQ日本語版(中川・大坊, 1985)より、28項目版(Goldberg & Hillier, 1979)に該当する項目を抜粋して用いた。得点が正規分布しやすいようGHQ方式(0-0-1-1)ではなく4件法の回答にそのまま1-4点を与え、高得点ほど心理的苦痛が大となるように指標化した。係数は男女とも.80以上であった。

実施方法 調査1の被調査者に対して、引き続き調査票への回答を依頼し協力を得た。

結果

各指標の平均値と男女差 最初に各指標の平均値を算出してt検定により男女差を検討した。福岡(1998)と同様、ストレス経験と心理的苦痛については有意な男女差は見られなかった。サポート指標では満足度のみ女性の方が高得点であった($t(231)=3.65, p<.05$)。

他者依存性と他指標との関連性 散布図を確認したところ分布上の問題や交互作用の傾向はみられなかったため、男女別に各指標間の相関係数を算出した(Table 3)。その結果、男女で若干異なるものの他者依存性はサポート満足度とは有意ないし有意傾向での負の相関があった、サポート源の人数との相関は有意水準に達していなかった。また他者依存性は心理的苦痛および生活ストレス評価と正の相関があった。その他、サポート源の

人数はストレス評価とは無関係であり、男子の場合には心理的苦痛とも関連がなかった。

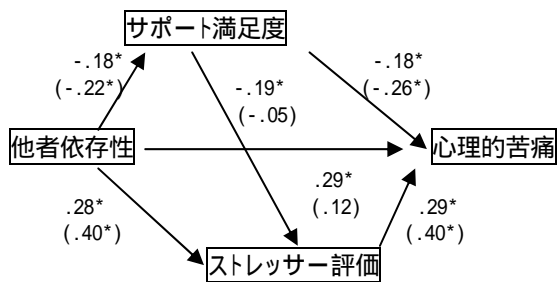
Table 3 指標間の相関係数(右上:男子、左下:女子)

指標				
他者依存性	-.13	-.18*	.31*	.42*
SS人数 ¹⁾	-.14	.14	.05	-.08
SS満足度 ²⁾	-.16+	.04	-.25*	-.30*
ストレス	.41*	-.09	-.12	.43*
心理的苦痛	.32*	-.24*	-.31*	.44*

¹⁾²⁾SS = ソーシャル・サポート

* $p<.05$ + $p<.10$

サポート関係への満足度が及ぼす媒介的影響 さらに、他者依存性と心理的苦痛との結びつきに及ぼすサポートの媒介的影響について検討した。ただしサポート源の人数については先の分析で依存性と有意な相関がなく、ストレス評価や心理的苦痛とも男女を通じ一貫した関連性が見られなかったため、サポート指標としては関係への満足度のみを用いることとした。そして、Cohen & Wills(1985)にもとづきサポートのストレス評価への影響を加味し「他者依存性 → サポート関係への満足度の低さ → ストレスのネガティブな評価 → 心理的苦痛」という仮説的な因果関係を設定して、男女別に完全逐次モデルによるパス解析をおこなった(Figure 1)。



* $p<.05$

数値は標準偏回帰係数を示す(上段:男子、下段括弧内:女子)

Figure 1 他者依存性と心理的苦痛の關係に及ぼすサポート満足度、ストレスの媒介的影響(パス図)

その結果、男女ともに、他者依存性の高さがサポート関係への満足度の低さをもたらし、それがさらに心理的苦痛へとつながる、というサポートの媒介的影響が有意であった。その他、男子ではサポート関係への満足度の低さがストレス評価をよりネガティブなものにし、それがさらに心理的苦痛をもたらすという影響経路もみられた。その他、男女ともにストレス評価を通じた心理的苦痛への媒介的影響も有意であった。なお他者依存性が心理

的苦痛に及ぼす直接の影響がみられたのは男子のみであった(以上 Figure 1 参照)。

考察

本研究の結果は、主として2つのことを示している。第一に、他者依存性の高い人はそうでない人に比べて、サポート源の人数はあまり変わらないにもかかわらず満足度が低いということである。この傾向は必ずしも顕著ではないが、研究1でみられた「サポートの入手可能性は変わらないのにサポートを受けることに対しネガティブな認知をする傾向がある」とこと対応している。第二に、サポート関係への満足度の低さが、他者依存性と心理的苦痛の結びつきを媒介しているということである。福岡(1998)とも考え合わせると、他者に頼りたいという強い欲求を持つ人は、サポート源の人数やそこからのサポートの入手可能性が低いわけではないにもかかわらず、満足度が低いために、心理的苦痛をより強く感じるようになるのである。他者依存性の強い人は、同じような量のサポートが得られると認知していながらも自分のサポート関係に満足できず、些細な出来事であってもそれを非常にネガティブなものとして評価してしまい、また必要なサポートを求めるとにも抵抗があるため、結果として心理的な苦痛が極めて強いものになってしまうのであろう。なお、他者依存性と心理的苦痛との直接的な結びつきが男子のみでみられたことは、他者に依存することの社会的な許容性が男女で異なることを意味しているのかもしれない(Spence & Helmreich, 1978を参照)。本研究の主眼とは異なるが、サポート過程の男女差を示唆する点で興味深い結果といえる。

総合考察

本研究では、サポートの入手可能性が量的に同様であるにもかかわらず依存性の高低によってサポートの心理的苦痛への影響力が異なることを示した福岡(1998)の先行研究をふまえて、他者依存性と心理的苦痛との関係を知覚されたサポートの視点から検討した。調査1では、知覚されたサポートの質的な違いの背景として、サポートを得ることに対する心理的な抵抗感の存在が示された。そして調査2では、サポート関係の構造的特徴(サポート源の人数)よりも、それへの主観的評価としての不満足感が他者依存性と心理的苦痛の関係を媒介していることが見出された。

本研究の結果は、他者への依存性の高さすなわち支持的・養護的な関係への過度の欲求は逆にサポートを受けることへの心理的な抵抗感を生む可能性があり、また同時にサポートを頼るべき相手への強い不満足感をもたらすことを示唆している。他者依存性の下位尺度から類推すれば、情緒的な依頼心と対人場面での社会的な自

信の欠如とは相互に結びついており、たとえサポートが入手可能であってもそれを自らの問題解決ないしストレスサーへの対処に活かすことができないのであろう。

このことは翻って、サポートの受け手にとってその有効性が発揮されるためには、自身に過度の依存的欲求があってはならず、またサポートの送り手にとっては相手が過度に依存的であったりまた相手の依存性を助長するようであってはならないことを意味する。これらは、他者依存性と知覚されたサポートとの関連性からみた、個人にとってのよりよい対人関係のあり方として指摘できる事柄である。本研究は大学生を対象とした横断的研究ではあるが、このような個人にとってのよりよいサポート関係への示唆も含むものである。

なお、本研究の結果からは、福岡(1998)と併せて、ソーシャル・サポート研究全般に対しても一定の示唆を引き出すことができる。それは、他者から必要に応じてサポートを得ることができるという知覚が心理的苦痛を軽減する効果をもつために、個人の内的特徴として一定の条件が必要だということである(Cohen, Hettler, & Park, 1997も参照)。その意味で今後、ソーシャル・サポートを個人内過程と対人的過程の両面から探求することが一つの方向性として有益であらう。

引用文献

- Baumeister, R. F. & Leary, M. R. 1995 The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Birtchnell, J. 1991 The measure of dependence by questionnaire. *Journal of Personality Disorders*, 5, 281-295.
- Blatt, S. J., D'Aflitti, J. P., & Quinlan, D. M. 1976 Experiences of depression in normal young adults. *Journal of Abnormal Psychology*, 88, 388-397.
- Bornstein, R. F. 1992 The dependent personality: Developmental, social, and clinical perspectives. *Psychological Bulletin*, 112, 3-23.
- Bornstein, R. F. & Johnson, J. G. 1990 Dependency and psychopathology in a nonclinical sample. *Journal of Social Behavior and Personality*, 5, 417-422.
- Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314.
- Cohen, L. H., Hettler, T. R., & Park, C. L. 1997 Social support, personality, and life stress adjustment. In G. R. Pierce, B. Lakey, I. G. Sarason, & B. R. Sarason (Eds.) *Sourcebook of social support and personality*. New York: Plenum. pp.215-228.
- Cohen, S. & Wills, T. A. 1985 Social support and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- 福岡欣治 1998 依存的な人にとってのソーシャル・サポートの限界 他者依存性と知覚されたサポートの効

- 果に関する基礎的研究 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 12-3, 4-1-4-11. http://sizcol.u-shizuoka-ken.ac.jp/~kiyou/12_3.html
- 福岡欣治・橋本 宰 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403-409.
- Goldberg, D. P., & Hillier, V. F. 1979 A scaled version of the General Health Questionnaire. *Psychological Medicine*, 9, 139-145.
- Greenberg, M. S. & Westcott, D. R. 1983 Indebtedness as a mediator of reaction to aid. In J. D. Fisher, A. Nadler, & B. M. DePaulo (Eds.) *New directions in helping*. Vol.1. *Recipient reactions to aid*. (pp.85-112.) New York: Academic Press.
- Hill, C. A. 1987 Social support and health: The role of affiliative need as a moderator. *Journal of Research in Personality*, 21, 127-147.
- Hirschfeld, R. M. A., Klerman, G. L., Gough, H. G., Barrett, J., Korchin, S. J., & Chodoff, P. 1977 A measure of interpersonal dependency. *Journal of Personality Assessment*, 41, 610-618.
- 久田 満 1987 ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究, 20, 170-179.
- Lefcourt, H. M., Martin, R. A., & Saleh, W. E. 1984 Locus of control and social support: Interactive moderators of stress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 378-389.
- McDonald-Scott, P. 1988 INTERPERSONAL DEPENDENCY INVENTORY Japanese Short Form (JIDI): その作成と検定について 看護研究, 21, 451-460.
- Nadler, A. & Fisher, J. D. 1986 The role of threat to self-esteem and perceived control in recipient reaction to help: Theory development and empirical validation. *Advances in Experimental Social Psychology*, 19, 81-122.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社
- 西川正之・高木 修 1990 援助がもたらす自尊心への脅威が被援助者の反応に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 30, 123-132.
- O'Neill, R. M. & Bornstein, R. F. 1990 Orality and depression in psychiatric inpatients. *Journal of Personality Disorders*, 5, 1-7.
- Overholser, J. C. 1992 Interpersonal dependency and social loss. *Personality and Individual Differences*, 13, 17-23.
- 尾関友佳子 1990 大学生のストレス自己評価尺度 質問紙構成と質問紙短縮について 久留米大学大学院紀要. 比較文化研究, 1, 9-32.
- Sarason, I. G., Levine, H., Basham, R. B., & Sarason, B. R. 1983 Assessing social support: The Social Support Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 469-480.
- Shilkret, C. J., & Masling, J. M. 1981 Oral dependence and dependent behavior. *Journal of Personality Assessment*, 45, 125-129.
- Spence, J. T., & Helmreich, R. L. 1978 *Masculinity and femininity: Their psychological dimensions, correlates and antecedents*. Austin: University of Texas Press.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人 ソーシャル・サポートの社会心理学 (セクション社会心理学8) サイエンス社

註

- 1) 本稿は、筆者らが日本健康心理学会第8回大会(1995)で発表した内容を新たな観点からまとめなおしたものである。ご指導くださいました橋本宰先生(同志社大学文学部教授)に深く感謝いたします。

Influence of social support on the relationship between interpersonal dependency and psychological distress

Yoshiharu FUKUOKA

(Faculty of Regional Cultural Policy and Management, Shizuoka University of Art and Culture)

This study investigated the effect of social support on interpersonal dependency and psychological distress in 233 college students by conducting two surveys. In study 1, the relationship between interpersonal dependency and perceptions related to receiving and giving support was investigated. Subjects with higher interpersonal dependency had a stronger desire for social support, as well as higher resistance to receiving support. In study 2, the relationship between interpersonal dependency, satisfaction with potential supporters, and negative life stressors were examined. Interpersonal dependency significantly correlated with lower satisfaction with support and higher psychological distress. Path analyses showed that dissatisfaction with support networks and life stressors mediated the link between dependency and distress. Based on these results, the nature of good supportive relationships is discussed.

Keywords: interpersonal dependency, social support, psychological distress, mediating effect, supportive relationships